

バードリサーチ ニュース

2009年8月号 Vol.6 No.8



Halcyon coromanda
Photo by Takeuchi Kai

参加型調査

キビタキの初認時期

～ 標高というより寒さが重要 ～

高木 憲太郎

キビタキ調査へのご参加ありがとうございます。7月31日までに153名の方にご協力いただき、全部で290件の情報が集まりました。そのうち繁殖地の初認情報が63件ありました。2009年5月号のニュースレターで中間報告をしました。その後、届いたデータも含めて分析をしたので、結果をご報告いたします。

寒いところほど初認が遅い

地域ごとの初認の情報を表にまとめました。これによって、九州から北海道に向けて徐々に渡ってくる様子を捉えることができましたが、地域によっては初認日に20日程度の幅があることもわかりました。土日や祝日に初認されることも多いですが、それ以外の日の初認情報も集まっています。休日の影響ばかりではなさそうです。

時期	九州	中四国	近畿	中部	関東	東北	北海道
4/09							
4月中旬							
4/13			1	1			
4/15			1				
4/16		2	1				
4/17			2	1			
4/18	1		4	1	1		
4/19		1		1	3	2	
4/20				1	1		
4月下旬							
4/21						1	
4/22					1		1
4/23						1	
4/24					4		
4/26		1	1	1	2	1	
4/27				1	1		
4/28			1	1	1		
4/29				1	2		
4/30				1		1	
5月上旬							
5/01						1	
5/02					1		
5/04						1	
5/08						1	
5/09					2		2
5/10						1	1
5月中旬							
5/11							2
5/12							1
6月上旬							
6/04						1	

表.
地域ごとと日ごとの繁殖地で初認された件数。日付が青字になっている日は土曜日、赤字になっているのは日曜と祝日を示す。

標高が高いほど初認が遅いという傾向はあるのですが、これだけでは上手く説明できませんでした。そこで、平均気温が5℃以下の日の、5℃との差を足し合わせた「寒さの指数」というデータを使って分析しました。この指数は簡単に言うと数字が大きいほど、1年間のうちにより寒い日が多くあるということを示しています。回帰分析を行なったところ、寒さ指数が大きいところほど初認が遅いということがわかりました(図1)。標高が高いところで初認が遅い傾向があったのは、気温が低いからだです。気温が低いと

いうことは、虫の発生する時期も遅いということが考えられます。キビタキは、餌条件が整う時期を見計らって渡ってきているのかもしれない。このことをきちんと調べるために、虫の発生量と初認日との関係を調査する簡単な方法を検討したいと思います。

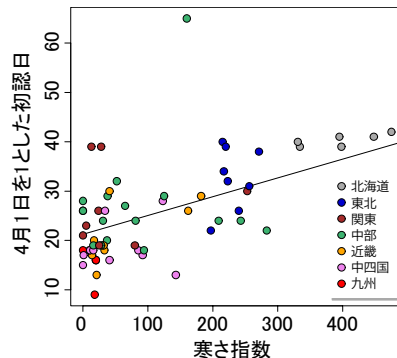


図1. 寒さ指数と初認日の関係。

キビタキがいた高さは？

この調査では、キビタキのいた地表からの高さの季節変化や天候との関係も調査してみました。

北海道で行われた研究では、高さ方向の虫の分布の季節変化によって、採食する高さが季節的に変化し、6月の後半だけ低い位置で採食するようになり、地上で採食する割合も高くなるということが示されています(Murakami 1998)。今回の調査でも、同じような季節変化を捉える事ができるかどうか、調べてみました。すると、6月になると2m以下でキビタキが見られなくなるという傾向がみられましたが(図2)、その時期にはデータ数自体が少なく、その影響が考えられます。来年は初認後も情報が集まるように工夫したいと思います。また、天気とキビタキのいた高さの関係も、雨の日の方が晴れている日よりやや低い位置で観察される割合が高いようだったので、いかんせん、雨の日のデータが少ないので、何とも言えません。さすがに、雨の日にはバードウォッチングに出かける人は少ないでしょうから、ちょっとこの企画は無理があったのかもしれない。

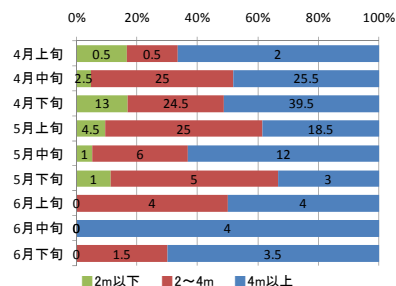


図2. キビタキのいた高さの季節変化。数字は件数。複数回答の場合は0.5とした。

引用文献

Murakami, M. 1998. Foraging habitat shift in the narcissus flycatcher, *Ficedula narcissina*, due to the response of herbivorous insects to the strengthening defenses of canopy trees. *Ecological Research* 13(1):73-82.

学会情報

日本鳥学会2009年度大会

今年の日本鳥学会の大会は9月19日から22日にかけて、北大水産学部(函館)で開かれます。発表の申し込みは締め切られていますが、参加の申し込みはまだ可能です。下記の大会のホームページから申込用紙をダウンロードして、必要事項を記入し、ホームページに書いてある大会事務局のメールアドレスに添付ファイルで送れば良いようになっています。残暑がまだまだ厳しい時期ですから、避暑や旅行をかねて、参加されてはいかがでしょうか？

バードリサーチのスタッフも大会に参加します。今回はICレコーダーを使った調査、カワウの移動追跡、森林性鳥類の長期モニタリングという3つの自由集会を企画しました。また、つぎの8つの口頭・ポスター発表を行なってきます。

■日本鳥学会2009年度大会のホームページ
<http://www.hucc.hokudai.ac.jp/~s16802/osj09top.html>

● 口頭・ポスター発表

なぜバードストライクはオジロワシばかり？

—オジロワシとオオワシの分布特性、飛行特性の比較—

○植田陸之・福田佳弘・守屋年史・中川元

近年、北海道でのオジロワシの風車への衝突が問題になっている。しかしオオワシのバードストライクによる死亡はこれまで確認されていない。そこで、なぜオジロワシばかりが事故にあうのかを検討するため、オジロワシとオオワシの生態的な特性を比較した。オジロワシは風車のある海岸部で多く、また頻繁に飛翔し、飛翔高度も低いことがわかった。これがオジロワシで事故の多い一因だと考えられた。

神戸市西区および稲美町一帯における ヒクイナの越冬期の生息状況 渡辺美郎・○平野敏明

神戸市西区から加古郡稲美町一帯でプレイバックによって越冬期のヒクイナの生息状況と大まかな環境との関係を調査した。2009年1月には201地点で調査を実施し、河川や溜池、農地などで合計79羽のヒクイナの生息を確認した。調査地点を大きく中規模河川、小河川、溜池に分けて比較すると、小河川では有意に生息数が少なかった。冬期、ヒクイナの生息の有無は、ヨシなどの湿地性の草原の面積と深くかかわっていた。

武蔵丘陵森林公園カワウコロニーにおける対策と効果測定 本山裕樹

埼玉県にある国営武蔵丘陵森林公園では、1996年から公園内の山田大沼の岸にカワウの営巣が確認されている。営巣分布域は年々拡大し、営巣による樹木の枯死・悪臭等の問題が起きており、分布域拡大の抑制のために公園管理所による追払い等の対策が行われている。本研究では、それぞれの対策の前後のカワウの個体数・営巣数・分布面積・営巣密度・分布域を比較することにより、対策の効果について検証した。

衛星追跡によるカワウの行動圏と 複数ねぐらの利用と広域移動の解明 ○高木憲太郎・福田道雄・徳田裕之 ほか

2008年度までの3年間に東京湾の第六台場、伊勢湾岸の弥富野鳥園、琵琶湖の竹生島でカワウを捕獲し、送信機を装着してねぐらから採食地までの距離やねぐら間の移動、広域移動の範囲を衛星追跡によって調査した。その結果、ねぐらから採食地までの距離や、広域移動の範囲、連携して対策を取るべき地域などが明らかになった。

カワウは自分のとまり場を占有しているか ○加藤ななえ・嶋 徹

千葉県にあるねぐらで、18ヶ月間、カラーリングをつけた個体を探してそのとまり場を記録した。特定の場所だけに居続けた個体もあれば、複数(2~4箇所)の場所を利用する個体もあった。各個体が最も長く使用していたとまり場の定着率の平均は0.862であった。このことより、巣場所に執着する必要のない「ねぐら」でも、カワウは自分のとまり場を占有している傾向が高いと考えられた。

カラス2種のなわばり防衛行動、 特に幼鳥の成長に伴う行動変化について 貞國利夫・黒沢令子・長谷川理・東正剛

これまで、ハシブトガラスとハシボソガラスの様々な行動生態学的研究がなされてきたが、防衛行動や繁殖成績との関係については詳細な研究例がない。今回これら2種の抱卵期から育雛期にかけてのなわばり防衛行動と採餌行動を観察したので、幼鳥の成長に伴う防衛行動の変化を中心に報告する。

シギやチドリは干潟の餌が多いところに集まる？ 守屋年史

渡りの中継地として主に利用される日本の干潟では、シギ・チドリ類の種数や個体数は干潟生態系の豊かさを反映しているのだろうか。渡り期に千葉県の三番瀬で干潟におけるシギ・チドリ類と底生生物の分布について調査をおこない比較を行なったところ、シギ・チドリ類の分布は、必ずしも対象としている餌動物の頻度分布と一致しなかった。

気温変化によるヒドリガモの移動 ○神山和夫・牧麗佳

地域的な気温の変化は、越冬中のカモ類が移動する原因の一つになっているのではないかと推測できる。これを確かめるため、2008年10月から2009年5月に関東より西でヒドリガモの個体数が多かった12カ所の調査地について気温と個体数が減少する時期の関係を調べたところ、気温の低い北陸と滋賀県では12月までに数が減り、さらに1~2月に減少する調査地では、積算温度の高い順に減少が始まることがわかった。

論文紹介

ヨーロッパの広域カワウ保護管理計画は、なぜ困難なのか？

加藤 ななえ

ヨーロッパ各国でもカワウの食害は大きな問題として取り上げられています。カワウが国境を越えた渡りをするため、各国が集まり、1997年にはヨーロッパ保護管理計画を策定しました。そして、この管理計画に基づいて、被害の軽減とカワウ個体群の維持を目指したのですが、調整がうまくいかず広域管理は機能しなくなってしまいました。この保護管理計画はなぜ失敗したのでしょうか？それを分析した論文が発表されましたので、ご紹介します。

1. ヨーロッパにおけるカワウ管理の現状

いくつかの国々にまたがる生息域を持つ種の保護では国際協定が結ばれます。ヨーロッパではガンやクマのような種の保護でうまくいっている例がありますが、カワウのように鳥獣害の問題が起きている種の管理ではまだ成功事例がありません。ドイツの環境研究センターに所属するBeherensさん達は、Convention on Migratory Species(移動性野生動物の種の保全に関する条約=ボン条約:以下CMS)で策定されたカワウ保護管理計画が失敗した原因を探るために、政治的また科学的な役割を担う人々の中から主要な関係者を選んでインタビューを行い分析しました。

CMSは被害対策の手法を多く収集して行動計画を設計しました。しかし、目標や体制が規定されていなかったため、大多数の関係諸国が計画に同意したにも関わらず、実行の足並みはそろいませんでした。その後、カワウはBird Directive(野鳥の保護にかかわるEC指令)の保護対象種から外されて、各国で狩猟の許可を出すことが可能になりました。それでも、繁殖期の銃器駆除や採卵は許可されないため、漁業関係者にとっては満足できる解決とはなりませんでした。その後も釣人たちの団体は広域の行動計画推進を再開するよう働きかけを行ってきました。しかし、嚴重に種を保護しようとするオランダから、銃器駆除で大掛かりな個体数調整を進めているフランスまで、各国の法規も様々なため調整もままならず、Ornis委員会(Bird Directiveの各国代表グループ)で採決することができたのは、科学的なワーキンググループで議論を継続するよう勧告することだけでした。



写真1. 群れで飛ぶカワウ。

2. インタビューから明らかになった問題点

複雑に絡み合う問題点は4つの観点から整理されました。1)調査結果と事実、2)価値観、3)主導、4)利害の調整です。1)については、立場が異なる漁業関係組織と野鳥保護団体がカウントしているカワウの個体数に大きな差が

あることで、カワウによる魚資源への捕食圧の影響評価がかけ離れたものになっていました。2)は、野生動物の権利擁護や魚は本来誰のものでもないという考えから個体数抑制に反対する人の意見と、漁業関係者の意見とが対立していました。3)は、ヨーロッパ全体での管理に期待を寄せながらも、それぞれの国は自国の方針が国際協定に拘束されることを嫌がるという問題がありました。4)は、環境保護と自然利用を管轄するそれぞれの行政の縦割りの弊害と、地域の取り組みと広域の観点の調整は不可能だという意見が、多くの人から挙げられました。

3. カワウの広域保護管理のための提案

Beherensさんたちは、これらのインタビューの分析から、広域カワウ保護管理計画を可能にするため、新たな提案を作成し(表)、次のようにコメントしています。「ステップ4へ到達すれば、被害の軽減とカワウを絶滅させないことの双方を保証することが可能になるでしょう。ステップ5の中央集権的な広域管理計画は、各国から強い反対を受けるでしょうが、その時点ではもはやそのようなものは必要なくなっているかもしれません。」そして、この提案では不十分かもしれないが、現在の状況が既に誰にとっても満足のものではない以上、関係者間の信頼の構築を目指す情報共有を出発点とするべきだと、提案しています。

表. Vivienさんたちが提案する解決のためのステップ。

ステップ1	国際的なモニタリングの推進。調査は異なる立場の関係者による共同作業として実行する。信頼関係を構築して共通のデータベースを作成する。
ステップ2	駆除個体の年齢構成を分析して、個体群の状態の把握にフィードバックする。
ステップ3	個体群の地域規模のモデルを作り、実現可能な管理方法の選択を検討する。
ステップ4	各国の管理計画の情報を共有する。
ステップ5	組織的で、詳細な広域管理計画を作成する。

日本にも、都府県の枠を越えて議論するカワウ広域協議会が関東と中部・近畿にあり、カワウのモニタリング情報の共有などが進められています。しかし、被害の内容や対応の考え方が都府県によって異なるため、広域一体的な提案を作りにくい状況があるなど、ヨーロッパと似た問題も抱えています。それでも、少し調整は必要になるでしょうがBeherensさんたちの提案のステップ1はなんとかかできると思いますが、ステップ2の情報収集のための体制を作ることからなら、形にしていけるのではないかと思います。



写真. 繁殖羽のカワウ成鳥。

4. 引用文献

Behrens, V., Rauschmayer, F. & Witter, H. 2008. Managing international 'problem' species: why pan-European cormorant management is so difficult. Environmental Conservation 35(1):55-63.

ブッポウソウ 英: Broad-billed Roller 学: *Eurystomus orientalis*

1. 分類と形態

分類: ブッポウソウ目 ブッポウソウ科

全長: 29.5cm(27.8-30.5) 翼長: 190mm (180-200)
 尾長: 102mm (92-109) 嘴峰長: 25mm (23-26)
 ふ蹠長: 19mm(18-20) 体重: 118.5-157.5g
 ※ 榎本(1941)より. 少数個体にもとづく値.

羽色:

キジバトよりもやや小さい。ほぼ全身が金属光沢のある青色だが、光線の具合によっては緑色にも見える。頭部や顔は黒褐色で、喉は群青色。風切羽と尾羽は濃い青色で、尾羽の先端近くは黒褐色。初列風切の基部に淡い水色で大きめの斑紋があり、飛行時に目立つ。嘴は赤味のある濃い朱色で目立つ。足は赤味のある朱色。雌雄同色でほぼ同サイズのため、求愛行動時や交尾時以外に雌雄の識別はできない。



写真1. ブッポウソウのオス(左)とメス(右).

鳴き声:

通常はゲツ、ゲツと一声ずつ区切って鳴くが、外敵やつがい相手以外の個体が侵入した時などにはゲゲゲゲゲゲゲなど連続して鳴く。

2. 分布と生息環境

分布:

日本では本州、四国、九州で繁殖する夏鳥であるが、その分布は局地的である。北海道や沖縄でも記録がある(日本鳥学会 2000)。山口県や鹿児島県、京都府など、県によってはすでに絶滅状態にある県も多い。現在多数生息している広島県と岡山県を除くと、生息が確認されている県での生息つがい数は、平均3~4つがい程度と思われる。

生息環境:

東日本と西日本で大きく異なる。東日本では社叢林やブナ林など大きな木が茂る環境に生息するが、西日本では水田や河川などと里山が混在する環境に生息する。

3. 生活史

繁殖システム: 越冬期 繁殖期 渡り 広島県

基本は一夫一妻で繁殖する。時にヘルパーの存在が推測されることもあるが、確認されていない。広島県では4月25日頃に渡来し、9月上~中旬頃に飛去する。繁殖は年1回で、産卵は5月下旬~6月上旬頃に行われ、雛は7月上~下旬頃に巣立つ。

巣:

東日本では大木の樹洞で繁殖するが、西日本では現在では鉄橋にある穴での繁殖が多い。広島県ではほぼ巣箱のみで繁殖している。かつて西日本では木製電柱などにオオアカゲラがあけた穴で繁殖していたが(飯田 1992)、現在では柱がコンクリートや鋼管製に交換されたことで見れなくなった。

卵:

一腹卵数は3~6卵, 平均4.7卵(n=11)。卵は光沢のない白色で、サイズは長径約37mm, 短径約30mm。

抱卵, 育雛期間, 巣立ち率:

抱卵期間は約25日, 育雛期間は約26日である。ヒナは巣立ち後も巣の周辺でしばらくの間親鳥からの給餌を受けながら育つ。

写真2. ブッポウソウのヒナ。1/2の幅に改良したカラーリングが付いている。



4. 食性と採食行動

主要な餌はトンボ類やセミ類などの大型昆虫で、比較的高い場所を飛行中のこれらの昆虫類を捕食する。しかし時には草むらや水面上低くを飛んで、驚いて飛び出したバッタ類やトンボ類などを捕食することもある。また、餌として食べた大型昆虫類を消化するために、体内で挽き臼として利用できる貝殻やプルタブなどを飲み込んでいられる報告がある(Nakamura & Tabata 1988)。

5. 興味深い生態や行動, 保護上の課題

● 大きく異なる生息環境

ブッポウソウの生息環境は、近畿~中部地方を境に、東日本と西日本とで大きく異なります。東日本ではブッポウソウはブナの巨木からなる深い森や神社の社叢林など、どちらかという人里から離れた巨木からなる森林に生息していますが、西日本、特に中国地方では、ブッポウソウはほとんど集落の水田地帯に生息しています。これは現在巣箱がかけられている環境が山の近くの水田地帯であることも大きいと思われるが、巣箱による保護の開始以前から、ブッポウソウは水田に立っている木製電柱などにオオアカゲラがあけて利用した後の巣穴で繁殖していました。中国地方にももちろんブナ林や社叢林はありますが、基本的にブッポウソウはそれらの場所に生息していません。中国地方のブッポウソウは、あくまで人の気配の濃い人家のすぐ横などに生息しているのです。このように同種の鳥でありながら、生息環境がここまで大きく異なるものは、日本国内ではあまりないように思われます。



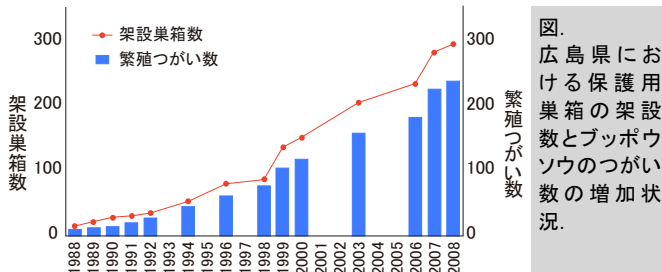
写真3. 集落の水田に立つ電話柱にかけられた巣箱で繁殖するブッポウソウ。近くに集落も見える。

● 野生動物保護の数少ない成功例

ブッポウソウはもともと個体数が少ない鳥で、宮崎県、長野県、山梨県、岐阜県の国内4カ所、その繁殖地が「ブッポウソウ渡来地」として国の天然記念物に指定されています。しかし近年急激に個体数が減少し、国の天然記

念物に指定されているブッポウソウ渡来地で、現在ブッポウソウが繁殖している場所はまったくありません。環境省のレッドリストでも絶滅危惧 I B類にあげられています。

中国地方では、ブッポウソウは木製の電柱を利用して繁殖していましたが(飯田 1992)、近年それらの木柱がコンクリートや鋼管製に交換されることで巣穴を失い繁殖できなくなり、特に1980年代に入ると急激に個体数を減少させていきました。最も減少した時期である1980年代後半には県内で8つがいにまで減少しました。しかし広島県では21年前の1988年から電話柱等の人工構造物に巣箱をかける保護を行ったことで(飯田 2001)急激に個体数が回復し、2008年には広島県内で237つがいの繁殖を確認するまでになりました(図)。この数は2000年頃に推定された国内推定生息数である300つがい(中村 2004)の約80%にあたります。絶滅の危機に瀕した種で、ここまで短期間に個体数が回復した保護の成功事例は、国内には他にないと思われます(飯田 2009)。



● 鋼管製の電話柱にかけた巣箱で繁殖する

電話柱などに巣箱をかけることは本来の使用用途ではないため、保護を行うにあたっては、柱の所有企業の理解を得る必要があります。大変苦労しました。しかしその後大きな成果をあげることができたため、現在ではブッポウソウはすっかり地域の宝になっています。飛来時期には住民の方々は気にかけていますし、自分の家の前の巣箱で繁殖する個体は「うちの鳥」と言っています。地元の小学校などでは、巣箱をつくってかけたり、巣箱の利用状況を調査したりしています。



写真4. 小学校での巣箱づくりの様子。

研究としては、近年環境省の標識用の足輪と共に、カラーリングを付けた調査を行っています。当初あまりに個体数が少なく調査の影響が危惧されたことと、ブッポウソウの再捕獲はまずないと思われること、それにブッポウソウは足が短くリングが1個しか付けられないこととリングの確認が困難なことから、これまでこうした調査は行ってきませんでした。しかし近年かなり個体数が回復したことと、カラーリングを切って幅を1/2にして、リング1個分の幅で足に付けられるパターンを増やす工夫をしたことなどから、数年前から実施しています。まだ成果は得られていませんが、今後長期継続して続けて行くことで、移動や寿命などの研究成果が得られるものと期待しています。

広島県から始まったこの人工構造物に巣箱をかける保護は、その後徐々に全国に広まりつつあり、今後全国各地のブッポウソウの個体群が増加傾向になることを期待しています。しかし広島県に隣接した山口県では、広島県に類似した環境であると思われるにもかかわらず、約5年前からの巣箱の架設でもいっこうにブッポウソウは繁殖せず、現在でも絶滅状態にあるままです。私が保護を開始した21年前には、山口県に生息するブッポウソウのつがい数は、広島県よりもむしろ多かったのですが、その時から保護を行わなかったことが現在の状況につながっていると思われます。この事例は、「保護の開始に早すぎることはない」ということを私たちに教えてくれているように思います。

この保護活動が全国に広まった結果、今は見られなくなった国の天然記念物のブッポウソウ渡来地にブッポウソウが姿を現し、再び繁殖するようになる日が来ることを期待しています。

6. 引用・参考文献

榎本佳樹. 1941. 野鳥便覧(下). 日本野鳥の会大阪支部.
 飯田知彦. 1992. 電柱を営巣場所にするブッポウソウ *Eurystomus orientalis* の繁殖分布. *Strix* 11:99-108.
 飯田知彦. 2001. 人工構造物への巣箱架設によるブッポウソウの保護増殖策. *日鳥学誌* 50:43-45.
 飯田知彦. 2009. ブッポウソウ *Eurystomus orientalis* の個体群保護の成功例. *野生生物保護学会会誌 Wildlife Forum Spring*. 2009:24-28.
 Nakamura, H. & Tabata, T. 1988. Why does the Broad-billed Roller *Eurystomus orientalis* bring Strange Objects to the Nest? *Jpn. J. Ornithol.* 36:137-152.
 中村浩志. 2004. 甦れ、ブッポウソウ. 山と溪谷社. 東京.
 日本鳥学会. 2000. 日本産鳥類リスト. 土倉事務所. 京都.

執筆者

飯田知彦 日本鳥学会会員

九州大学大学院生物資源環境科学府博士課程修了。農学博士。もともと保護に関心があり、クマタカなど絶滅の危機に瀕する鳥を中心に研究を行っていました。クマタカの研究をはじめて27年になりますが、クマタカのフィールドへの途中でブッポウソウが繁殖しており、その巣がある電話柱が木製からコンクリート製に交換されることを知り、その柱に巣箱を架設しようと23年前に企業と交渉を始めたことがブッポウソウの保護をはじめたきっかけです。近年は生



息していると予測を付けて瀬戸内海で夏季にカムリウミスズメの調査を行い、その予測が当たったことで、それまで生息していないとされた瀬戸内海でカムリウミスズメの生態研究も行うことになり、さらに忙しくなりましたが、新たな発見の連続で充実した研究活動を行っています。

活動報告

設立5周年記念集会開催報告

8月8日に京王線府中駅徒歩6分のルミエール府中にて、5周年記念集会を開きました。遠くは広島や長野からもお越しいただきました。定員50名の会場いっぱいのご参加、ありがとうございました。皆さんに支えられて今があるのだなあと、改めて感じました。株式会社シー・アイ・シー様からはとても立派なコチョウランを贈っていただきました。ありがとうございました。

記念集会では、東京大学の樋口先生に「鳥の渡りと地球温暖化 一個体数と分布モニタリングの重要性」というタイトルで基調講演をしていただきました。衛星追跡による調査によってわかった多くの種の渡りの生態や地球温暖化による産卵日の遅れといった鳥への影響について、お話していただきました。衛星追跡のような高度情報通信技術によって得られた成果は多いですが、個体数や分布などのモニタリングといった地道な調査の積み重ねがあるからこそだと、そうした調査の重要性を最後に語られていました。

立教大学の三上さんには、スズメの全国の個体数の推計とその減少についてご講演いただきました。スズメの数は日本人の人口と比べて、多い？少



樋口先生による講演の様子。

ない？といった一般にも分かりやすい問いかけから始まる講演でとてもわかりやすい説明でしたが、最後は1990年に比べて2～5割も減っているのではないかと、普通種だからといって見落としてはいけないという警鐘が心に響いてくる講演でした。このほか柴田さんからは銀座のカラスとゴミの量の関係を調べた報告を、福田さんからは行動や骨格の性差を調べてその原因を調べた報告を、平野さんからはヒクイナの分布の変化について気候の変化などを交えた報告をしていただきました。

懇親会では、バードリサーチの会計や業務の監査をしていただいている監事の宮崎敬さんに、ブルースを3曲披露していただいたり、ビンゴゲームを企画しました。一押しの景品はソニー製の録音機、そのほか、東郷なりささん手作りのブックカバーなどをご用意しました。懇親会にはおよそ40名の方が参加していただき、思い思いに輪ができて、談笑が途切れない楽しい会になったと思います。今後も皆さんとのコミュニケーションを大切にしながら、より良く面白い調査活動を展開していきたいと思っています。どうぞよろしく願いいたします。【高木憲太郎】



お知らせ

モニ1000 研修会・成果報告会参加者募集！

日本野鳥の会と共催でモニタリングサイト1000陸生鳥類調査の研修会・成果報告会を開きます。今年は東北、関東、中部、四国、九州で開催。来年以降は、これ以外の地域をまわる予定です。2日間にわたる会で、初日が、モニ1000の紹介とこれまでに得られた成果の報告、スポットセンサスと植生調査の方法の講義を行ないます。また、皆さんの研究発表も募集し、その場所の鳥についての情報交換をしたいと思っています。もちろんそのあとは懇親会で交流をはかります。2日目は野外実習。スポットセンサスと植生調査を体験していただきます。

開催地、日時は右のとおりです。ご興味のある方は、ホームページ (http://www.bird-research.jp/1_event/monita.html) よりお申し込みください。お会いできること、楽しみにしています。なお、会場の定員を超えた場合には受付を締め切らせていただくことがあります。ご了承ください。【植田睦之】

日程および開催地：

- 10月3日(土)、4日(日)
東京都内「国立科学博物館附属自然教育園」(港区)
- 10月17日(土)、18日(日)
福島県内「裏磐梯高原・ペンションとも」(耶麻郡)
- 10月24日(土)、25日(日)
石川県内「加賀市鴨池観察館」(加賀市)
- 12月12日(土)、13日(日)
愛媛県内「石鎚ふれあいの里」(西条市)
- 1月23日(土)、24日(日)
熊本県内「森林総合研究所九州支所」(熊本市)

開催時刻： 1日目 13:30～17:00
2日目 9:00～12:00

バードリサーチニュース 2009年8月号 Vol.6 No.8

2009年8月13日発行

発行元： 特定非営利活動法人 バードリサーチ
〒183-0034 東京都府中市住吉町1-29-9
TEL & FAX 042-401-8661
E-mail: br@bird-research.jp

URL: <http://www.bird-research.jp>

発行者： 植田睦之

編集者： 高木憲太郎

表紙の写真： アカショウビン